

2009年度一般入試前期A日程（2月4日実施）

国語問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題は、12ページです。どのページも切り離してはいけません。試験時間中に、印刷の不鮮明や落丁・乱丁等気づいた場合は、手を挙げて知らせてください。
3. 解答は、すべて解答用紙の所定欄に、問いの指示にしたがって記入してください。
4. 解答用紙には、黒の鉛筆(シャープペンシル可)を使用し、はっきりと丁寧に記入してください。ボールペン、万年筆、サインペンなどを使用してはいけません。また、答えを訂正する場合は、消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。
5. 解答用紙を破ったり、汚したりしないように注意してください。
6. 試験開始までに、監督者の指示にしたがって、解答用紙にあなたの氏名(カタカナ)および受験番号を記入してください。
7. 問題用紙は、試験終了後、持ち帰ってください。

(以下余白)

□ 次本文を読んで、あとの問いに答えなさい。

はし鷹ののりのかがみえてしがな思ひおもはずよそながらみむ⁽¹⁾

むかし、天智天皇と申すみかどの、野にいでて鷹狩りせさせ給ひけるに、御鷹、風にながれてうせにけり。むかしは、野をまもる者ありけるに、召して、「御鷹うせにたり、たしかにもとめよ」と仰せられければ、かしこまりて、「御鷹は、かの岡の松のほつえに、南にむきて、しか待る」と申しければ、おどろかせ給ひにけり。⁽²⁾「そもそもなんぢ、地にむかひて、かうべを地につけて、ほかを見る事なし。いかにして、こずゑにゐたる鷹のあり所を知る」と問はせ給ひければ、野守のおきな、「民は公主におもてをまじふる事なし。しばのうへにたまれる水をかがみとして、かしの雪をもさとり、おもてのしわをかぞふるものなれば、そのかがみをまぼりて、御鷹の木居を⁽³⁾知れり」と申しければ、そののち、野の中にたまれりける水を、野守のかがみとはいふなり、とぞいひつたへたるを、野守のかがみとは徐君のかがみなり、そのかがみは、人の心のうちをてらせるかがみにて、いみじきかがみなれば、よの人、こぞりてほしがりけり。これに、さらに我持ちとげじと思ひて、塚の下にうづみてけりとぞ、また人申しける。いづれかまことならむ。

(出典 『俊頼髓脳』)

注1 ほつえⅡ上の枝

注2 公主Ⅱここでは君主の意

注3 木居Ⅱ木の枝にとまっていること

問1 ——線(1)「えてしがな」の現代語訳として、最も適当なものを、次の中から選び、記号を書きなさい。

- ア 絵に描いたようだ イ 得意がっているらしい ウ 映していたのだよ エ 手に入れたものだ

問2 〓線「られ」と文法上同じ意味で用いられているものを、次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

- ㊦ 知らぬ国に吹き寄せられて、島に着きぬ
- ㊧ 吹く風によるづのあはれは思ひ知られぬ
- ㊨ それこそまづ聞かまほしけれ、語られよ
- ㊩ 入りて伏したまへれど、寝入られず

問3 〓線(2)「おどろかせ給ひにけり」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の中から選び、記号を書きなさい。

- ㊦ 平伏した野守に、鷹が見えるはずはないから
- ㊧ 視力の衰えた野守に、鷹の居場所がわかるはずはないから
- ㊨ 鷹が風に流されて、行方が分からなくなったから
- ㊩ 野守が、鷹は手の届かない場所にいると答えたから

問4 〓線(3)「うづみてけり」の主語は誰か。次の中から選び、記号を書きなさい。

- ㊦ みかど
- ㊧ 野守
- ㊨ 徐君
- ㊩ また人

問5 本文の内容に合うものを一つ選び、記号を書きなさい。

- ㊦ 冒頭の和歌は、天智天皇が鷹狩りの時に詠んだ歌である
- ㊧ 野守の鏡の由来には、異なる二つの伝承がある
- ㊨ 野守は、自分の老いを知るために、水たまりに姿を映していた
- ㊩ 人の心を映す鏡というのは、とても恐ろしい鏡である

□ 次本文を読んで、あとの問いに答えなさい。

生まれてから今まで、どんなうそもついたことがないという人は、まずいなだろう。政治家だけがうそをつくわけではない。うそは社会のあらゆる分野にみられ、私たち自身の日常生活のなかにも浸透している。身近な対人関係のなかでの小さなうそから、社会全体の命運を左右するような大がかりなうそまで、あるいはまた他人に大きな被害を与えるうそから、無害なうそ、さらには有益と思われるうそまで、うその種類や働きもさまざまである。ある意味では、芸術や宗教も、そして科学さえも、一種のうそといえないことはない。それらはいずれも、ある種のフィクションのうえに成り立っているものだからである。

(ア) いずれにせよ、うそは人間社会のなかに広く遍在し、そのなかでさまざまの役割を果たしている。たしかにうそはしばしば加害―被害関係をとまなうけれども、反面、ある種のうそなくしては私たちは生きてゆけないであろうし、私たちの社会生活も成り立たないであろう。うそが遍在し、さまざまな機能を果たしているという事実は、それが人間および社会の本性に深く結びついたものであることを暗示しているように思われる。

最も常識的な用語法では、うそとは「自己が真実と思わぬ事柄を真実と知っているかのように他人に語ることを意味する。あるいはもう少し **A** して「当事者が自らの意識するリアリティと表現との間に意図的につくりだす一種のずれ」といってもよい。しかし、うそをつくという行為はしばしば自己の利益をはかる意図や動機に基づき、 **B** 加害―被害関係をとまなうことが多いので、この観点からうその概念をよりせまく限定して、「自己の利益と他人への損害を結果する場合」だけを「うそ」と呼ぶこともある。

(イ) むろん逆に、 **C** なうそ概念をもっと拡張することもできる。つまり、ごまかし、にせもの、演技・演出、馴れあい、つくりごと（フィクション）などをも、うそのカテゴリーのなかにふくめて考えるわけである。この最も広義のうそを、ここでは **D** 「うそ現象」と呼んでおこう。たとえば、競馬、競輪、相撲などにおける八百長、あるいは第八回ポストン・マラソンにおける女子優勝者（のちに失格）の地下鉄利用のトリック、さらには人気画家の贋作騒動、あるいはまた公共事業をめぐる建設業界の談合入札などなど――この種の事柄はすべてうそ現象にふくまれる。

以下では、うその概念をなるべく広くとって考えたいと思う。しかしそのために無用の混乱を招くことは避けなければならないので、さしあたり、右にみた三つのレヴェル――すなわち、常識的な意味での広狭二義のうそ概念と、それらをふくむ最広義のうそ概念（¹⁾う

そ現象」——を区別しておくことにしたい。

(ウ) 常識的な意味でのうそは、「真実と思わない事柄をあたかも真実と知っているかのように語る」という二重性において成り立っている。最広義のうそにしても、基本的には同じことである。うそ現象は「そうでないものをあたかもそうであるかのように……」(あるいは、その逆) という二重性において成立する。

うその二重性は、いわば肯定と否定との二重性である。うそをつくる人は、原則として、真実を知っていなければならぬ(少なくとも、知っていると思っていなければならぬ)。そのうえで、彼はそれをいつわるのである。こうして彼は、真実(あるいは彼がそう思っているもの)を一方で肯定しながら他方で否定している。J・P・サルトルの表現をかりるなら、うそをつくる人は「自分では真実を肯定しながら、自分のことばにおいてはそれを否定し、さらに自分自身に対してはこの否定を否定する」のである。この種の否定なくしては、うそはありえない。それゆえ、「虚偽は一つの否定的態度である」。

何かを「否定」する能力は、しばしば人間の特質のひとつに数えられる。ケネス・バークは、彼の「人間の定義」のなかに「人間は否定形の発明者である」という一項をふくめた。彼によれば「自然界には否定は皆無であり、ただ存在がある」にすぎない。⁽²⁾「自然のなかに否定形を求めることは樹にのぼって魚を求めるに等しい」。人はたとえば「いま寒暖計は二四度を示しているか」と問うことができる。それが二四度以外のところを示しているなら、この質問に対する正しい答えは「二四度ではない」ということになる。しかし二四度ではないなどという温度はこの世に存在しないのである。

(エ) むろん、否定の能力を人間の特質のひとつとみる考え方はバークだけのものではないし、また必ずしも新しいものでもない。たとえばスピノザは、デカルトにしたがって、肉体(物質)に対比される精神(意識)の^{特徴を思惟にあるとし、さらにその思惟の本質は}否定にあると考えた。こうした考え方は、その後ヘーゲルを経て現代の哲学者(たとえばサルトルなど)にも及んでいる。

こうした哲学的な議論に対して、バークはむしろ「E」の文脈を重視している。否定の能力は人間のシンボル使用能力と密接に結びついており、それから切り離して考えることはできない。「否定形はシンボル体系のみがもちうる機能である」。もともと、シンボルというものの自体、それが表示するものではないことを特徴としている。犬という言葉はひとつの記号であって、犬そのものではない。このことを承知していなければ、言葉(シンボル)を適切に使用することはできない。シンボルの世界できわめて重要な役割を果たすメタ

ファーやアイロニーについては、いうまでもない。メタファーは「字義通りのものでない」点に特色があり、アイロニーは「現実ではないものを想定してはじめて成立する」。

(出典 井上俊『悪夢の選択』なお問題作成上、一部省略してある)

問1 空欄 A、E に入れるのに、最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

A ア 一般化 イ 対象化 ウ 具体化 エ 限定化

E ア 哲学 イ 政治 ウ 文化 エ 思想

問2 空欄 B、D に入れるのに、最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

B ア かえって イ したがって ウ しかるに エ とはいえ

D ア なおさら イ つまり ウ また エ かりに

問3 空欄 C に入れるのに、最も適当な言葉を、本文中より三字で抜き出しなさい。

問4 本文中、次の一文が省略されている。(ア) (エ) のどこに入れるのが最も適当か、記号を書きなさい。

どのレヴェルでとらえるにせよ、うその根底にはある種の二重性がある。

問5 ~~~~~線「思惟」の読みを書きなさい。

問6 ———線(1)「うそ」の「三つのレヴェル」のうち、最も狭い「うそ概念」の例として、最も適当なものを、次の中から選び、記号を書きなさい。

ア 病気の友人を見舞い、顔色が悪いのに気づいたものの、「元氣そうに見える」と言って慰める

イ ファーストフード店の店員が、体調が悪いにもかかわらず、マニュアル通りに愛想よく客と会話する

ウ アルバイトで、四時間しか働かなかつたのに、八時間働いたと言って、一日分の給料を騙し取る

エ ゴッホの絵画「ひまわり」のにせものを、いかにも本物らしく立派に額装して、部屋に飾る

問7 ———線(2)「自然のなかに否定形を求めることは樹にのぼって魚を求めるに等しい」の内容として、最も適当なものを、次の中から選び、記号を書きなさい。

ア 自然のなかには寒暖計など存在せず、それゆえ寒暖計が二四度を示すか示していないかなどという問いは、それ自体、無意味である

イ 何かを否定することは人間が生み出した言語体系の働きであるので、自然には存在しえず、自然界にそれを求めるのは馬鹿げている

ウ 人間だけが物事を複雑に考え、否定的な見方をするのであり、他の動植物はみな、あるものをあるがままに受け入れて、泰然としている

エ 寒暖計が二四度を示すか示していないかという問いは言語上の問題であり、それは樹にのぼるとか魚を求めるとかいうのが言語であるのと同じである

問8 本文の内容に合うものを、次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

ア 芸術や宗教、科学などは、人間が生み出すものである以上、たとえそのつもりではなくても、誤って真実でないことが含まれてしまう可能性があり、その意味で一種のうそといえる

イ スピノザは精神と肉体を対比したうえで、精神活動を否定的に見ているが、この観点はデカルトから受け継いだものであり、その影響は、ヘーゲルやサルトルにまで及んでいる

ウ 言葉(シンボル)というものは、それが表示するもの自身ではないので、たとえば犬を犬と呼ぶこと自体、実はその犬の存在を否定しているというパラドクスを生じさせることになる

エ 人間のシンボル使用能力は、たんに猫を猫と呼ぶだけでなく、猫を「貴婦人のようだ」とたとえるメタファーや、遅れて来た人に「早く来たね」というアイロニーにまで広がっている

③ 次の文を読んで、あとの問いに答えなさい。

監禁の時代の端緒を告げるのは、一六五六年にフランス国王が発表した「一般施療院」の設立を命じる布告である。パリに最初に設立された施療院だけでも、住民のパーセントに相当する六千人の貧者が監禁された。国王の権力のもとに、住む家をもたない貧者が閉じ込められることになったのである。

これらの貧者が施療院に監禁されたのは、狂人だからというよりも（理性）に反する者だからである。そして施療院は現在の病院ではなく、「当時フランスにおいて組織されつつあった君主制的ブルジョワ的な秩序の権力機構の一つ」である。

この種の施設は数年間でヨーロッパ中に広まった。フリーコー注1は雑多な人々をすべて同じ施設に監禁しようとするこの試みが普及したのは、ヨーロッパ中においてひそかに共通の感受性が形成されていたからだと考えている。監禁施設が突然のように拡大したのは、この感受性が表面に浮上してきたからだというのである。A この「感受性」はどのようにして形成されたのだろうか。それまで社会の末端に平穩に住んでいた浮浪者を監禁しなければならぬと、だれもが感じ始めたのはなぜだろうか。

最初に考えられるのは、B 要因による説明だろう。この一七世紀半ばの時期は、西欧社会が全体的な危機に直面した時期である。スペイン経済の危機に由来した賃金の低下、失業、貨幣価値の低落などのために、貧窮者対策が緊急に必要とされていた。最初はこの施設は「C な生活を過ごし、妥当な賃金で働こうとしない者」を監禁することが主要な目的とされていた。しかし次第に貧民の労働力が評価されるようになる。労働力が不足するようになると、監禁によって安価な労働力を確保すると同時に、失業者による暴動を防止できることが期待されるようになる。（ア）

D フリーコーの考えでは、こうした経済的な有効性よりも、宗教改革によって労働に対する考え方が変化してきたことの方が重要な意味をもつ。マックス・ウェーバー注2が示したように、宗教改革によって、労働は厭うべきものではなく、自分が救済されることを確認するための一つ的手段となった。労働は神聖な行為となった。すると貧困は救済すべき悲惨な状態ではなくなり、慈善事業は罪悪とみなされるようになる。貧困を神聖なものと考え、宗教的な感性から、貧困を非難すべきであると考え、道徳的な感性への移行が生じたのである。（イ）

この感性によると、労働しないことは「神の力を試すこと」だった。これはすべての反抗の中でも、最悪の反抗とみなされるようになる。

ったのである。このようにして監禁施設における労働は、倫理的な意味をおびる。怠惰とは最高の反抗形態であり、監禁された者は、それが経済的に収益をあげられるかどうか、有用であるかどうかとはまったく無関係に、強制的に労働させられるようになる。施設院では病人の隔離だけが目的とされていたが、一七世紀以降の監禁施設では、監禁するだけではなく、労働させることが自己目的となった。狂気が白昼において暴れ回っていた『リア王』の時代からわずか半世紀で、狂気は監禁の砦の中に閉じ込められ、道徳律の支配する単調な夜の中に封じ込められたのである。

誕生したばかりのこの監禁施設に幽閉された狂気は、医学と錯綜した関係を取り結ぶようになる。この施設では医学と道徳が、狂気に対して共犯関係にあった。西洋社会に新たに形成された狂気に対する感性においては、狂気はなんらかの「罪」を犯したものと考えられていた。(ウ)

同時に、一人の人間が狂気であるかどうかを判定するのも、道徳的な要素であった。当時のフランスにおいては、ある人間を狂人であると判断し、権力に監禁を要求するのは家族であった。家族の道徳にふさわしくないと判断された人間は、たちまち狂人と分類され、監禁され、身体を責め苛まれることになるのである。(エ)

この監禁という制度は一つの「道徳的な革命」であり、フーコーは現代の精神病理学も、狂気に関する科学的で医学的な知識も、この経験から自由でないことを指摘している。ここで形成されたのは、さまざまな「非難すべき行為」を概括する一つの「E」であり、それが非理性である。理性と非理性、**F** 理性と狂気の分割の線を引き、狂気とはなにであるかを定義したのは、この道徳的な意志だった。

(出典 中山元『フーコー入門』なお問題作成上、一部省略してある)

注1 フーコー||ミッシェル・フーコー、一九二六〜一九八四、フランスの思想家

注2 マックス・ウエーバー||一八六四〜一九二〇、ドイツの社会学者

問1 空欄 A、D、F に入れるのに、最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

A ① たとえば ② あるいは ③ その他は ④ ようするに

D ① または ② むしろ ③ かえって ④ しかし

F ① すなわち ② ところで ③ いわゆる ④ ただし

問2 空欄 B に入れるのに、最も適当な言葉を、本文中から三字で抜き出しなさい。

問3 空欄 C に入れるのに、最も適当な言葉を、本文中から二字で抜き出しなさい。

問4 本文中、次の一文が省略されている。(ア) (エ) のどこに入れるのが最も適当か、記号を書きなさい。

このため、狂気をへ治療するという医学的な行為が、その罪をへ罰するという道徳的な行為を含むようになったのである。

問5 空欄 E に入れるのに、最も適当な言葉を、次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

① パターン ② カテゴリー ③ モデル ④ シンボル

問6 マックス・ウェーバーは宗教改革が労働観念をどのように変化させたと考えたか。最も適当なものを、次の中から選び、記号を書きなさい。

① 宗教改革以前は、労働は神の意志に沿った神聖な営みと見なされていたが、宗教改革以降は巨万の富を得ることが神の栄光を地上に実現することになると信じられた

② 宗教改革以前は、労働は神の意志に反する忌避すべき行為と見なされたが、宗教改革以降は神の意志に沿った行為として見なされるようになった

③ 宗教改革以前は、貧困は天国への狭き門に通じる道であると信じられていたが、宗教改革以降は労働と富の獲得こそが人生における最高の価値となった

④ 宗教改革以前は、貧困の中に生きることが神聖な人生のありようであると信じられたが、宗教改革以降は信仰そのものが衰退していった

問7 監禁施設が一七世紀のヨーロッパで広まる原因となった「ヨーロッパ共通の感受性」の説明として、最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

- ア 勤勉は信仰的にも道徳的にも正しい人間のありようであり、働かないことは信仰上の背信行為である
- イ 労働への従事は倫理的に正しい行為であり、神の意志とは無関係に近代市民社会における義務である
- ウ 人に課せられた義務はこの地上において神の栄光を目に見える形で実現することであり、そのための方途こそ労働である
- エ 神の沈黙をもってその不在を実証しようとする行いこそが怠惰であり、これは神への最悪の反抗である

問8 本文の内容に合うものを、次の中から一つ選び、記号を書きなさい。

- ア フーコーによれば、精神病理学という学問体系はその本質的な部分において、信仰や道徳の影響を受けており、近代科学を立脚点として、そのありようをもう一度見直す必要がある
- イ フーコーによれば、一七世紀のヨーロッパはスペイン経済の破綻に起因する失業や賃金低下、失業者の増大に直面し、その緊急的な対策を行う上で労働に対する考え方を変化させる必要があった
- ウ フーコーによれば、「狂気」とは理性の外部に位置するようならゆる行為・感性・欲望の総称であり、その理性が社会や時代の要請の中で形成された人為的なものである以上、「狂気」は自然の側に位置づける必要がある
- エ フーコーによれば「狂気」とはなんらかの実体をともなうて存在しているわけではなく、宗教改革以降、ヨーロッパで形成された道徳律Ⅱ理性から逸脱した行為の総称を意味する

四 次の1～5の説明にあてはまるものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、記号を書きなさい。

1 三大随筆のうち、天災や飢饉の描写がある作品

ア 『枕草子』

イ 『池亭記』

ウ 『方丈記』

エ 『徒然草』

2 本居宣長が『源氏物語』や和歌の本質として主張した理念

ア なぐさみ

イ もののあはれ

ウ 言文一致

エ たをやめぶり

3 正岡子規や高浜虚子らが活動の拠点とした俳誌

ア 『アララギ』

イ 『スバル』

ウ 『ホトトギス』

エ 『文学界』

4 『二銭銅貨』『怪人二十面相』などの作者で、日本における推理小説の草分け

ア 横溝正史

イ 黒岩涙香

ウ 松本清張

エ 江戸川乱歩

5 『壁』S・カルマ氏の犯罪』や『砂の女』など、超現実的、前衛的手法で知られる小説家・劇作家

ア 芥川龍之介

イ 安部公房

ウ 鶴屋南北

エ 坂口安吾

【五】 次の1～5の空欄 に入れるのに最も適当な語を、それぞれ後の選択肢の中から選び、ことわざを完成させなさい。

1 嘘も

目的を遂げるためには、たまには嘘をつく必要もあるということ

2 は寝て待て

幸運は自分ではどうにもならず、時を待つしかないこともあるということ

3 三度目の

最初はだめでも、三回目にはうまくいくというたとえ

4 君子は する

人の態度などが突然変わるさま

5 怪我の

失敗や無意識の行為が、思いがけずよい結果を生むたとえ

- ア 正直 イ 吉報 ウ 功名 エ 鳴動 オ 念仏 カ 方便 キ 真実 ク 果報
- ケ 因果 コ 豹変